

島根県邑智郡石見町

中山古墳群発掘調査概報

1977

石見町教育委員会

例　　言

- 1) 本書は、石見町と石見町上地改良区が進めている団体営中山農地開発事業に伴って発見された中山古墳群（島根県邑智郡石見町所在）の発掘調査にかかる調査概報である。
- 2) 調査は、昭和51年度国庫および県費補助事業として石見町（町長鳥居大二）がつぎのような組織と構成でこれを行った。

調査組織

調査員 島根県教育委員会文化課

　　文化財保護上事　蓮岡法暉

　　同　主事　勝部昭

　　同　前島己基

　　同　松本岩雄

　　同　嘱託　三宅博士

島根県埋蔵文化財調査員 石井悠

調査補助員　勝部衛 内田律雄 上田辰秀

調査指導　島根県文化財保護審議会委員 山本清

事務局　石見町教育委員会

調査期間　昭和51年8月17日～同11月14日

- 3) 本書の執筆・編集は三宅博士、松本岩雄、前島己基の3名が協議し、これを行った。
- 4) 発掘調査および遺物整理ならびに本書の作成にあたっては県教育委員会文化課から多大な援助と協力を得た。
また、発掘調査の際には地主および町内関係各方面の方々から終始献身的な援助をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

I 調査に至る経過

昭和51年6月、島根県邑智郡石見町の中山丘陵において石見山間部では他に例をみない大規模な古墳群が発見された。すなわち、昭和48年から4ヶ年の継続事業として進められていた団体営中山農地開発事業に伴う造成工事により、たまたま箱形石棺1基が露出し、これを契機に造成予定地を含む附近丘陵一帯の分布調査が行われたところ、実に100基を越すとみられる夥しい数の古墳が判明した。もともとこの中山丘陵には、最北端に箱形石棺を内部主体とする7基からなる大崎山古墳群があり、また、丘陵南部の一角には箱形石棺1基があつて中山古墳と呼称されていたが、まさか丘陵の全域にわたってこれほど多くの古墳が存在するとは、実のところ予想だにされていなかった。

遺跡の重要性を踏まえ、石見町教育委員会では早速、工事を担当する石見町土地改良区など関係各機関と調整を計る一方、遺跡の取り扱いその他について県教委とも種々協議を重ね、次のような方針で対処することとなった。(1) 中山丘陵を地形のうえから便宜上A～Dの4地区に分けると、古墳の大半をのせたD地区丘陵は、計画外にあるため問題はないが、これと連なるC地区については一部造成が予定されているのでこの部分は計画を変更し、現状の保存を計る。(2) 造成その他によりすでに他の丘陵から孤立したA、B地区には10数基の古墳と他に土壙墓の存在が予想されるので全面発掘を行い、その結果に基づいて改めてその取り扱いに関する協議を行う。(3) D地区については将来的な保存計画を計るため別に機会を得て詳細な分布調査を実施し、古墳群全体としての様相を把握する。

今回の中山古墳群A・B地区丘陵の発掘調査は、以上のような経緯により実施したものである。

II 位置と環境

中山古墳群は島根県邑智郡石見町大字中野の中山丘陵に所在する。すなわち、石見中央山間部のほぼ中央、ちょうど矢上川と井原川が合流し、江川支流の濁川に注ぐ、いわば於保地盆地の入口にあたり、南側は県道三次一江津線、東側は井原川、西側は矢上川によって三角形状に開まれた独立山塊の主・支脈上に群在して営まれている。丘陵の標高は210m、水田面との比高30～35mを測り、主脈は南から北に向ってのび、その長さ約1.3kmある。いまのところ古墳群全体としての分布調査が行われていないので詳細は明らかでないが、古墳はおおまかに丘陵の南側からA～Dの4ブロックに分かれ分布している。古墳の個々の規模は、さほど大きくななく10～15m前後の小円墳が大半を占めるが、C、D地区には一部、小規模ながら前方後方墳や方墳らしきものもみられ、これらのなかには墳裾に列石を伴うものも注意されている。このうち以前から知られていた大崎山古墳群はD地区古墳群を構成する一支群で、かつて箱形石棺の一つから発見されたという小型仿製鏡1と附近出土という古式須恵器の滑形鏡などが伝えられている。



図1 石見町内の主要遺跡

- 1. 中山古墳群調査地区
- 2. 余勢の原遺跡
- 3. 池の尻遺跡
- 4. 銅鐸出土地
- 5. 後原古墳
- 6. 塔の本古墳
- 7. 諏訪神社裏古墳
- 8. 反原古墳群
- 9. 仮屋古墳群
- 10. 庄塚古墳
- 11. 天藏寺原遺跡
- 12. 前竹古墳

弥生式土器（前期後半から後期終末期）、古式土器等が採集された丘陵西側微高地の余勢の原遺跡とともに中山古墳群出現の前史を知る上で重要な鍵を握る遺跡である。このほか向山無山西南麓の河岸段丘上に仮屋古墳群、大高下原古墳群、反原古墳群など小規模な後期の古墳群があり、また点々と土師器、須恵器の散布地も注意されている。さらに、井原川対岸の台地には天藏寺原遺跡、庄塚古墳等が分布している。

III 調査のあらまし

中山古墳群のうち今回発掘調査の対象となったA地区は、古墳群全体からいうと南部丘陵の一支脈にあたり、標高225m～230mの馬背状にのびる細長い丘陵である。発掘に先立ち行った分布調査では当初、この地区には丘陵の起伏から5基の古墳の存在が考えられていた。一方、B地区は西南端の一角を占める丘陵で、後世の鉄穴流しと造成によりすでに他の丘陵から切り離され、孤立していたが、旧地形によるともとは鞍部をはさんで南端が大きく東にわたってA地区丘陵と連なる一連の丘陵であったことが知られる。この丘陵も馬背状にのびる細長い丘陵で、西側にはこれからのがびる3つの小支丘があり、また、東側にも南寄りに小さな支丘がのがんでいる。このたびの古墳群発見の契機となった箱形石棺は、本丘陵の南端にあり、これを加えこの丘陵には、分布調査の段階で7基の古墳とほかに土壙墓の存在が想定されていた。

調査は立木の伐薪、地形測量図の作成と併行して盆明けの8月17日から着手したが、地盤が軟弱な花崗岩のばいらん土質で地山の風化、流失が著しく、遺構の検出が困難をきわめたうえ、B地区において予想をはるかにうわまる各種多数の遺構が存在していたことなどから、結局現場での調査は当初予定より大幅に遅延し、小雪のちらつく11月14日までの約3ヶ月を要した。

ところで、石見町内の遺跡については、これも十分な分布調査がなされていないが、これまで知られている中山古墳群周辺の主な遺跡をあげると（図1）、まず、矢上川をはさんで中山丘陵の西前面に屹立する向山無山の麓に我が國銅鐸出土の西限地として著名な仮屋遺跡がある。大正3年に扁平鉢式と突線鉢式の2口が一括発見されたもので、ともに現在、東京国立博物館に収蔵されている。最近石見町総合グランド造成に伴い、多量の

IV 遺構と遺物

丘陵のほぼ全域にわたる発掘調査によって検出された遺構は、当初の予想をはるかにうわまわり、A地区で古墳1、B地区で土壙9、石蓋土壙1、箱形石棺墓3およびこれらを両する溝状遺構7ならびに古墳5を数えた。特にB地区丘陵の北半部には狭い尾根上にありますところなく多数の遺構があり、図2に示すように古墳1をはじめ土壙9、石蓋土壙1、箱形石棺3、溝状遺構7の5種21基が発見された。詳細については別に正式な報告書を刊行する予定であるが、これらの遺構は全て埋葬に関係するもので、形態のうえからつぎのように大きく(1) 墓丘を伴わず、墓域を溝で画した無墳丘墓、(2) 盛土を施した、いわゆる古墳形式のもの2種に分けて説明することができる。なお、検出した遺構については古墳をSK、土壙墓などをSX、溝をSDとし、北側から順次番号を付して処理した。

無墳丘墓 溝状遺構によって一定の墓域を画し、その中に木棺を直葬したとみられる土壙あるいは石蓋土壙または箱形石棺を埋設した形式のもので、B地区丘陵の主丘北半部および西側の北寄り2支丘において検出された。溝は主丘・支丘とも尾根に直交して掘り込まれ、これによって画された墓域は、主丘上に隣接して5箇所、支丘上にそれぞれ1箇所ずつの計7箇所であり、主丘上では溝を共有して溝と溝にはさまれた墓域の幅は、おおむね10m前後を測る。尾根の両斜面には何ら加工は施されていないが、尾根幅が狭いこともあって意識としては方形の墓域を画そうとしたものと考

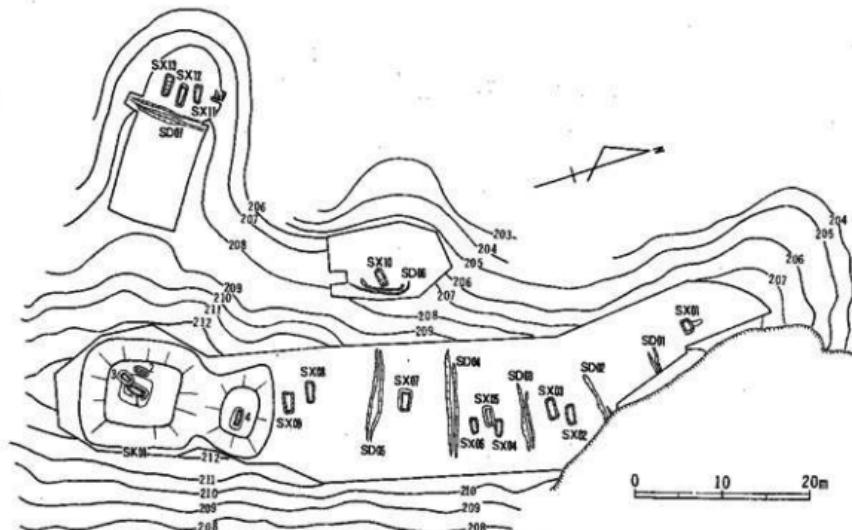


図2 B地区北半部の遺構の配置

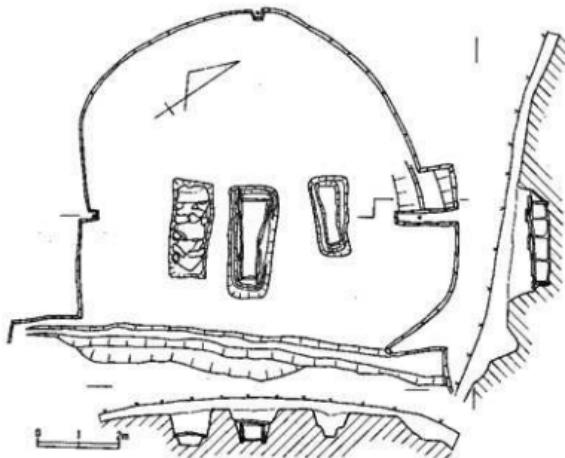


図3 B地区中央西支丘の無墳丘墓

然地形を利用して一種の方形墓域を画し、その中に箱形石棺を埋置した土壙を中心にして石蓋土壙墓と二段掘り土壙墓の3つを平行して設けたものである（図3）。

まず、中央の箱形石棺（S X-12）は、長さ2.72m、幅1.16～0.9m、深さ0.72mの隅丸長方形2段掘りの土壙内に据えられており、内法で長さ1.9m、幅は西側小口が広く0.6m、東側が0.4m、深さ約0.3mを測る。石材としては比較的薄い板状石が用いられており、蓋石の間隙には目張り用の灰白色粘土がつめられ、入念なつくりとなっている。副葬品は認められなかったが、埋葬當時地表面であったと思われる土壙の上面には壺、器台など多数の古式土師器片が集積していた。これらの土師器は、埋葬儀礼に伴う飲食物の供獻行為に際し、その容器として用いられたと考えられるもので、同様な土器片の集積は多少の差はあるものの主丘・支丘をとわざ大半の無墳丘墓で指摘され、特に最北端のS X-01の土壙墓上面ではほとんど供獻時そのままの状態を思わせる出土状況を示していた。なお、この中央箱形石棺には土器片にまじって土壙上面のほぼ中央に一種の墓標と見得る標石1個が置かれていた。こうした事例は主丘上のS X-02、S X-09、西支丘北側のS X-10でも注意された。

中央箱形石棺の南側に平行して設けられた石蓋土壙墓（S X-13）は、上縁の長さ2.4m、幅0.9～1.0mの長方形二段の土壙を掘り込み、その段を利用してこれに板状の蓋石を架構したもので、土壙の深さは0.85mある。これには土器の集積、標石といったものはみられず、副葬品も認められなかった。木棺を直葬したとみられる北側の土壙墓（S X-11）も掘り形はやはり隅丸長方形の2段掘り土壙で、上縁の長さ2.4m、幅0.9～1.0mあり、壙底までの深さ0.67mを測る。これにも副葬品等は認められなかった。

えられる。各墓域の内部には、それぞれ1～3個の埋葬施設が認められ、それらには小口の一辺が長い隅丸長方形ないし方形プランの土壙内に木棺を直葬したもの、箱形石棺を納めたものあるいは蓋石のみを伴うものの3種がある。

いまその一つ、中央の西支丘から発見されたものをあげると、これは西に向ってのびる尾根に直交して主丘側に長さ約10m、上縁幅0.5m、深さ0.4mの溝（SD-07）を設け、他の3辺については支丘の自

他の無墳丘墓も規模や構造、埋葬主体の数、その他に若干の相異はあるものの、おおむねこの中央西支丘の無墳丘墓と同様な特徴をそなえたもので、いずれからも副葬品は発見されていない。

出土土器については十分な整理、検討を終えていないが、これら無墳丘墓に供獻されていた土器は、壺、甕およびこれをのせる器台、その他高杯、脚付盤形土器など各種のものがあり、なかには器面に赤色顔料を塗布したものもみられる。これらは山陰の古式土師器を鍵尾I式→鍵尾II式→小谷式→大東式という変遷過程でとらえた場合、一部に小谷式土器を含むが、大半は鍵尾I式から鍵尾II式の特徴をそなえたものである。

古墳 当初A地区で5基、B地区で7基の古墳の存在が想定されていたが、調査の結果、それには一部丘陵の自然起伏が含まれており、結局、墳丘を伴うものとしてはA地区から1基、B地区から5基の計6基が古墳として確認された。ただし、これらのうち完存するのはB地区の1号墳のみで、他は全て後世の鉄穴流あるいは造成等により墳丘を損っていた。内訳はA地区の1基が径約9mあまりの平壠した円墳で箱形石棺を内部主体とするもの(図4)、B地区は無墳丘墓群につづく丘陵南半部の主丘尾根上に北から前方後方墳1基(B-1号墳)、円墳ないし方墳と推定されるもの1基(B-4号墳)、南端に方墳とみられるもの1基(B-5号墳)がつづき、南側の西支丘にも一辺約7mの方墳2基(B-2・3号墳)が隣接して築かれていた。内部構造についてB地区では1号墳のほかに3号墳と5号墳においてそれぞれ箱形石棺が検出されたが、他は墳丘の大半と主体部を失い、詳細については不明であった。

これらのうち特に注目すべきは、B地区丘陵のほぼ中央、無墳丘墓群の南につづく尾根幅の最も広い所に營まれたB-1号墳で、小

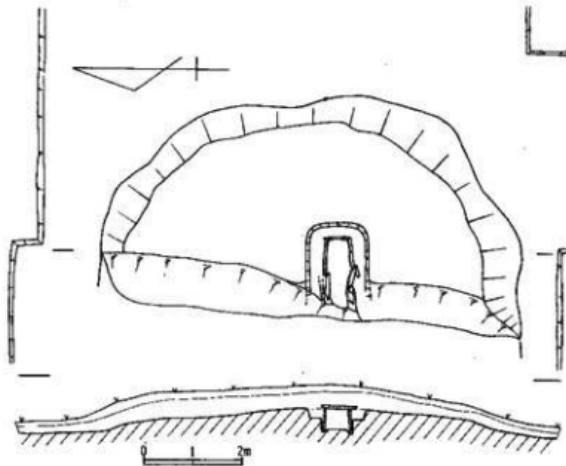


図4 A-1号墳実測図

規模ながら墳形が前方後方形をなしていることである。前方部を北に向かって、全長約22m、後方部長さ14m、幅13m、高さ1.4m、前方部長さ8m、幅10.4m、高さ0.7m、くびれ部幅7.2mあり、一墳多葬で後方部に3つ、前方部に1つの計4つの箱形石棺が埋置されていた。後方部のほぼ中央に位置し、本墳の中心主体と考えられる第1主体は、墳丘の主軸に平行して3.2×3.1m、深さ0.5mの隅丸方形の土壙を掘り、その中に箱形石棺を仕組んだものである。石棺は内法で長さ1.62m、幅南側で0.4m、北側で0.24m、深さ0.5mあり、蓋石の間隙には厚く灰白色粘土が詰められていた。石材も他

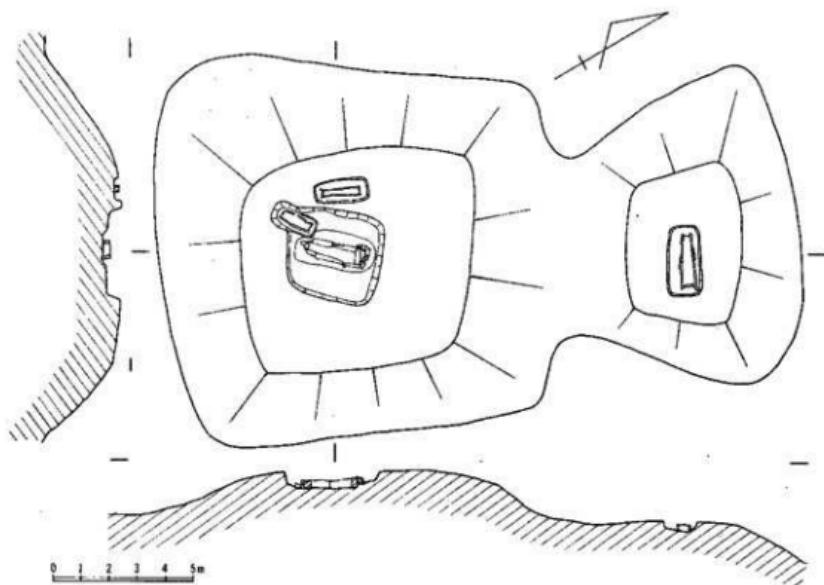


図5 B-1号墳実測図

より厚く大きなものが用いられ、棺内には北側に頭蓋骨1とその両側に鉄剣がそれぞれ1口づつ副葬されていた。特記すべきは、これに附属する施設として北側小口に副葬品を納めるために設けられたポケット状の副室が設けられていることである。すなわち、石棺の北側小口の壁を利用してその外側に薄い板状石を孤状にたてめぐらせた小室で、規模は内法で 0.45×0.2 mを測る。上部は石棺の蓋石がかかり、内部には方形板革綴短甲1、鉄斧1、刀子1が納められていた。発見された短甲はやや縦長の鐵板を上下3段に重ねたもので、後胴上縁の押付板はやや彎曲した半月形に近い1板の鐵板でできている。方形板より一時期新しい長方板の革綴短甲は鳥取市古郡家1号墳から出土したものが知られているが、こうした方形板のものは管見にふれる限り山陰では初見のものであり、全国的にも類例の少ないものとして注目される。第2主体は、第1主体に平行して西側に仕組まれた小型の箱形石棺である。棺材はきわめて薄い板状石が用いられ、内法で長さ1.18m、幅0.2~0.12m、深さ0.2mを測る。これには副葬品等はみられなかった。

第3主体は、第1主体の土壤の南西隅を一部切り込んで設けられた箱形石棺で、長さ1.14m、幅0.2~0.26m、深さ0.27mを測る。これにも副葬品などは認められなかった。

第4主体は、前方部の中央に墳丘の主軸と直交して据えられている。箱形石棺の長さは内法で1.62m、幅1.2~1.6m、深さ0.34mあり、副葬品等は伴わない。なお、前方部の北東墳丘斜面から若干の土師器片が出土したが、器種、型式などは細片のため不明である。

本墳の築成過程については封土や地山そのものの流出などがあって明確さを欠く点もあるが、調査の結果による限りおむねつぎのごとく復原することができる。まず、自然地形を利用しながら地山に切削加工を加え、ややいびつな前方後方形の墳域を作り出し、ついで後方部と前方部に相次いで土壌が掘り込まれ、内部に箱形石棺が仕組まれる。むろん、埋葬に伴い各種の埋葬儀礼がとり行われたと思われるが、なかでも後方部中央の第1主体に埋葬された被葬者については造殻のかたわらに鉄剣2口が副葬され、別に副室を設けて短甲、鉄斧、刀子が副葬されるなど、他の3被葬者に比べ特に手厚く、盛大な儀礼が行われた。それはこの被葬者が本墳の中心主体であり、いわば本墳築造の本来の目的が彼の埋葬のためにあったからであろう。

ところで、本墳に葬られた4被葬者の間には埋葬の時期はいかほどの差のあったことはいうまでもないが、調査では土壌の切り合いから第1主体→第3主体という関係が知られただけで、4人全員についての前後関係は不明であった。ただし、土壌の検出面は調査による限り、4主体とも地表面にあって封土中から掘り込まれたものは認められなかった。とすれば、墳丘上に盛土が施され、完全に墳丘の築成が完了したのは、4被葬者の埋葬が終了した時点であった可能性が強い。そして、仮に4人の埋葬時期にさほど大きな時間的差がなかったものとすれば、第1主体の副室に納められていた方形板革綴短甲が4世紀後半に特徴的なものであることから、本墳の築造時期もおおむねそのころに求めて大過なかろう。

V ま と め

以上、中山古墳群のうち今回調査の対象となったA・B地区について調査結果の概要を記してきたが、ここでこのたび得られた成果のなかから特に注目すべき2、3のことがらについて触れ、むすびにかえたい。

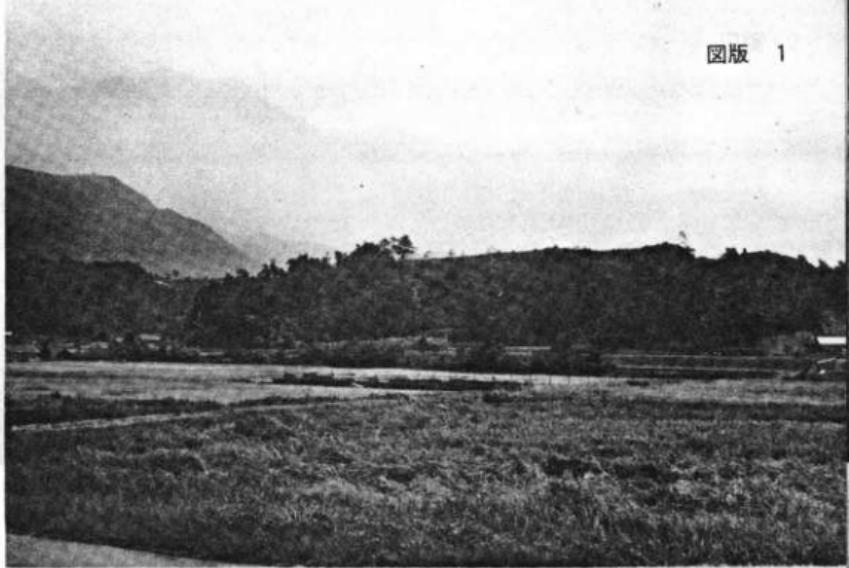
まず、B地区丘陵において無墳丘墓群と墳丘を有する古墳形式のものが併存していることは、單に中山古墳群の生成、発展の問題にとどまらず、石見山間部における弥生時代から古墳時代への移行過程とその後の発展過程を知る上で興味ある資料を提供したということができる。すなわち、無墳丘墓群は、墓域を単に溝状構造によって平面的に画しただけのもので、土壌の内部に木棺、箱形石棺などを1～3個埋置し、かつ、群集墓としての在り方を示している。埋葬儀礼については、ほとんど例外なく上壌の上面に土器を供獻するが、副葬品はみられない。これに対してB-1号墳などのような古墳形式のものは、盛土によって平面的にも立面上にも一つの独立した墓域を占有し、その築造には無墳丘墓をはるかにうわまわる多量の労働力の集中的投下が必要で、無墳丘墓よりも進んだ段階の在り方を示している。時期的にも無墳丘墓群に供獻されていた土師器は、山陰の古式土師器のうち最も古いグループの鎌尾I式から一部小谷式の特徴をそなえたもので、古墳形式のものは、時期の明らかなものの中ではB-1号墳が最も古く、4世紀後半に築かれたものとみられ、他の古墳もこれに続く時期のものである。要するに弥生時代社会のなかで進展した階層の格差が次

第に顕在化し、それに伴い集団構成員の中から特定のグループが析出される。しかし、彼らはなお、独立して墓域を占有するに至らず、前時代的な弥生墓を形成するにとどまっている。他地域に比べると一テンポ遅れるが、やがて彼らの中から地域社会を統括する特定個人があらわれ、その地域社会の首長へと昇進した彼の死に際し、墳丘を有する古墳形式の高塚が築かれたと考えられるのである。

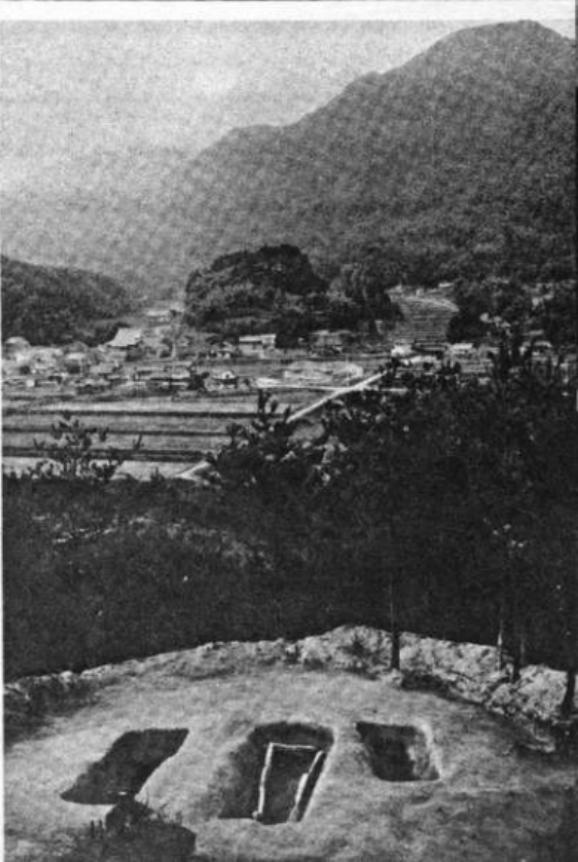
つぎに、B-1号墳が小規模ながら前方後方形をなしていることは、従来、石見地方ではこの種墳形の古墳が知られていなかっただけに注目すべき新知見を加えたことになる。方墳とともに前方後方墳が特に多い出雲と石見との関係については、古墳時代初期に出雲で独自に出現し、発達したとみられる四隅突出型方墳が、石見町の隣りにあたる邑智郡瑞穂町の順崖原1号墳で発見されるなど、その結び付きの強さが憶測されるが、注意すべきは、石見の海岸、山間部を通じてこれまで発見されている古式土師器は、全般的に弥生式土器の伝統が濃厚で底部の丸底化や複合口縁化のおくれ、胎土の粗さなど一見して出雲部のそれと識別できる特徴をそなえたものである。ところが、中山古墳群B地区の無墳丘墓群に供獻されていた古式土師器は、石見部でこれまで知られていたものとは異り、器形、施文、胎土、色調など細部にわたって出雲の古式土師器と酷似し、きわめて出雲的色彩の強いものである。出雲部に特徴的な前方後方墳が存在していることとも併せ考へると、石見の中でも特にこの於保知盆地は、出雲ときわめて密接な関係をもっていたことが窺えるのである。

古墳群全体としてはその一部を検索したにすぎず、群全体の様相は明らかでないが、それでも農業経営単位としては決して大きいとはいえない、この石見中央山間部の於保知盆地に100基を越すとみられる一大古墳群が形成されていることは、B-1号墳に全国的にも類例の稀少な方形板革綴短甲が副葬されていたことともあいまって、単に農業生産力だけでは理解し難いものがあるといえる。石見山間部は、出雲などとともに古くから良質な砂鉄の埋藏地帯として著名なところであるが、この中山丘陵における一大古墳群の存在は、あるいはその背後にそうした砂鉄生産といったものを考へるべきではなかろうか。古代史上、重要な位置を占め、華々しい歴史が展開した出雲との結び付きも案外、そうした鉄をめぐる問題にその解決の糸口がひめられているのかもしれない。

いずれ、丘陵全域にわたる分布調査が行われ、古墳群全体としての様相が明らかになれば、この中山古墳群は、單に石見山間部の古代史にとどまらず、さらに広範な地域社会の問題として一層重要性を増すものと思考される。



1 古墳群遠景(西から)



2
B 地区丘陵から
向歯無山を望む



1
B地区丘陵
(南から)



2
B地区丘陵の
発掘後

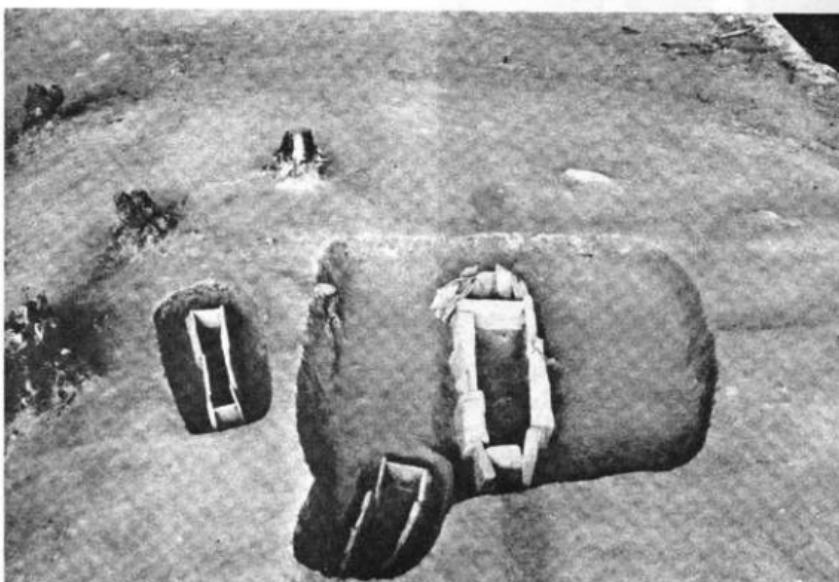


3
B地区中央西
支丘の無墳墓
(東から)



1

B-1号墳後方
部の主体（南か
ら）



2

発掘後のB-1
号墳後方部の主
体（南から）



1

B-1号墳後方部の
主体（東から）



2

B-1号墳第1主体
(南西から)



3

B-1号墳第1主体
副室と短甲出土状態